

# 社会貢献活動の30年

三菱商事では、1973年の社会環境室設置以来、国内外でさまざまな社会貢献活動を行ってきました。真に豊かな社会を実現するため、展開している活動分野は、「地球環境」「福祉」「教育」「文化・芸術」「国際交流」の五つ。今後もさらに推進していきたいと考えています。三菱商事が30年間で行った社会貢献活動を年代別に紹介します。

## 1970s

母と子の自然教室（07・18～27ページご参照）

人工臓器の研究・開発（06ページご参照）

リモート・センシング（06ページご参照）

## 東京コロニー

東京コロニーは社会就労センター（授産施設）や福祉工場など、障害者の特性に合わせた職場を提供し、障害者が仕事を通じて「（社会への）完全参加と平等」を実現することを目的とした社会福祉法人で、中親コロニーなどとの合併を経て、1968年に「社会福祉法人東京コロニー」として認可されました。印刷業を中心に活動を始め、ホームページ制作などのIT事業や防災安全用品製造など徐々に事業を拡大しており、現在では東京都内9カ所の社会福祉施設に、360名を超える障害者の方々の働く場を提供しています。

三菱商事では'79年に訓練用コンピュー

ターを寄贈した後、'93年からは、東京コロニーの重度身体障害者在宅パソコン講習事業等の「教育」、職業紹介・コンサルティング事業などの「雇用支援」、SOHOの支援事業などの「就労支援」という障害者自立への三つの柱をバックアップすべく、支援を続けています。



1980s

## 三菱商事太陽

三菱商事では、1979年から社会福祉法人太陽の家への支援を行ってきました。太陽の家は、障害者がプログラマーやシステムエンジニアとして社会で就労するための授産施設を支援する目的で設立されたもので、三菱商事は、その授産科目である「情報処理科」を支援するべく継続的に寄付をしています。その結果、プログラマーとして自立可能な障害者も多数育ってきたため、彼らが社会復帰し、能力を發揮する職場として、三菱商事と太陽の家との共同出資で'83年、「三菱商事太陽株式会社」が設立されました。

コンピューターによる情報処理の受託、マルチメディア・コンテンツの制作、オンデマンド印刷を主な事業内容とし、受注から納品までを障害者自らの手で管理・運営しています。



1990s

## 熱帯林再生実験プロジェクト

世界各地における熱帯林の減少は、人類の存続にもかかわる重大な問題の一つです。熱帯林は、一度破壊されたら元の姿に戻るのに300～500年かかるとも言われ、その減少は、自然生態系の保全や温暖化の原因であるCO<sub>2</sub>の吸収、異常気象・自然災害など地球環境の保全に大きな影響を及ぼしています。

三菱商事では、1990年に「マレーシア熱帯林再生実験プロジェクト」を開始し、横浜国立大学名誉教授宮脇昭博士による潜在自然植生理論に基づく“ふるさとの木によるふるさとの森づくり (Native Forests with Native Trees)”に積極的に取り組んでいます。この理論は、現地固有の植物を密植・混植方式で植林して40～50年という短期で自然林に近い生態系をよみがえらせるというもので、「マレーシア熱帯林再生実験プロジェクト」に続いて'92年には「アマゾン熱帯林再生実験プロジェクト」も開始されました。三菱商事は企画から運営管理、資金調達を担当、実験開始から5～10年が経過した今、小さいながらも熱帯林の森が育ちつつあります。今後も産業界、研究機関、政府機関との連携の下、世界の熱帯林再生事業に寄与していきたいと考えています。また、2001年には、経済発展により環境破壊が進んだ中国・上海市で、「グリーンベルト・プロジェクト」が進められ、三菱商事はエリア内の一部で宮脇方式による植林を行っています。



2002年8月現在



1991年7月  
マレーシア熱帯林再生実験  
プロジェクト第1期植樹祭

## 外国人留学生奨学金

三菱商事では、1991年から、世界でリーダーとして活躍が期待される優秀な外国人留学生を支援することを目的とした奨学金制度を設けています。現在は慶應義塾大学や早稲田大学など、



5校の指定大学から1名ずつ推薦された、経済学、商学、法学、社会学を専攻する大学・大学院の留学生を対象として、奨学金を1年間授与しています。

## 七里ガ浜クリーンアップ

「七里ガ浜クリーンアップ」は、1991年に社内で社会貢献活動の新企画を公募した際に採用された活動です。第1回目は同年11月10日に行われ、社員やその家族、友人など約140名と、地元の自治会やボランティア団体を合わせた総勢約260名が集合しました。開会式の後、三菱商事から支給された軍手とゴミ袋を手に、



全長約3キロの海岸のうち600メートルを掃除、1時間後には燃えないゴミ100袋と燃えるゴミ400袋が収集されました。その後、多摩川のクリーンアップ活動も開始し、96年まで実施しました。

## 中部支社自然教室

この自然教室は、名古屋YMCAの主催、三菱商事の協賛により1991年から開催しています。毎年夏に、愛知県下の児童養護施設の小学6年生約35名を岐阜県郡上郡高鷲村のキャンプに招待し、大自然の中でゲームやキャンプファイアーをしながら2泊3日を過ごします。毎年、三菱商事の社員ボランティアが参加しており、YMCAのスタッフと共に事前トレーニングや打ち合わせを行い、プログラムを作り上げています。



## 大分国際車いすマラソン大会

三菱商事は、1981年の国際障害者年を記念して開始された「大分国際車いすマラソン大会」(大分県ほか主催)に'91年から協賛しています。この大会は、世界最大の規模とレベルを誇る障害者スポーツ競技会の一つです。三菱商事では、障害者の社会



参加が促進され、障害に対する人々の理解が深まるとともに友情の輪が世界中に広がっていくことを願い、社員ボランティアが毎年参加、会場設営準備や選手のケアなど、レースの運営に協力しています。

## 劇場「アーツフィア」の支援

三菱商事は、1992年から異業種の企業が参加する支援グループ「東京オペニオンズ」参加企業として、東京・天王洲にある劇場「アーツフィア」の活動を支援しています。

劇場が2001年から取り組んでいるバリアフリー活動にも積極的に参加しており、社員ボランティアが障害者・高齢者の案内、車いすの介助、エレベーターへの誘導補助などを行っています。



## 日米草の根交流サミット大会

財団法人ジョン万次郎ホイットフィールド記念国際草の根交流センターは、日米交流促進のための財団法人で、三菱商事は1992年の設立当初からこの財団の理事会社を務めています。

同センターが主催する「日米草の根交流サミット大会」は、毎年日本と米国が交互に開催地となって、両国の市民が個人の立場で自由に意見交換し、相互理解と親交を深めることを目的としています。2003年は、10月に千葉県で第13回大会が開催されました。



## はばたけ 21 未来の子どもたちへ

ロシア極東地方のハバロフスクとウラジオストクの小学生30名を新潟に招待し、新潟市の小学生30名、地元ボランティアなどと共に1週間を過ごす国際交流プログラムです。三菱商事新潟支店が発案・協力し、地元企業・行政との連携で、1992年に三菱商事

の地域貢献施策の一環としてスタートしました。

この活動を通じて、子どもたちは、生活・習慣や意思疎通を図る言葉の違いなどの問題を乗り越え、身振り手振りでも心が通じ合えるということを身をもって体験しています。



## 丸の内市民環境フォーラム

三菱商事は、1993年から東京海上火災保険、日本航空システムと共催で、一般の方々の環境への関心と理解を深めることを目的に、毎年、「丸の内市民環境フォーラム」を開催しています。このフォーラムは、さまざまな分野の専門家が環境に関連したテーマで講演する環境入門講座で、

これまでに共催3社の社員をはじめ、広く一般の方々にも多数ご参加いただいています。



## 国際フレンドシッププログラム

このプログラムは、北浦和にある「国際交流基金日本語国際センター」で研修中の外国人日本語教師と、三菱商事をはじめとする三菱グループ4社（東京三菱銀行、三菱地所、旭硝子）の社員ボランティアが約半年にわたり交流を続けるもので、1993年から2002年まで実施しました。社員ボランティアは外国人研修生の“サポーター”としてお茶会や顔合わせパーティー、ガーデンパーティーなどでの交流を通して日本語上達のお手伝いをします。外国人研修生にとっても日本の暮らしや文化を知る良い機会となりました。



## 児童養護施設向けサッカースクール

三菱商事は住友商事・三井住友海上火災保険・三井物産・Jリーグ選手協会と協働で、1996年からJリーグの選手による児童養護施設向けサッカースクールを開催しています。

2002年からは、FC東京とベガルタ仙台のコーチ指導の下、東京都内と仙台市内の児童養護施設の小学生を対象としたサッカースクールも年2回ずつ開催しています。

毎年延べ300名以上の子どもたちが参加しており、技術指導を受けたり、社員ボランティアと試合を行ったりと楽しい1日を過ごしています。



## 上智大学寄付講座

三菱商事は、環境教育を支援するため1996年から上智大学で寄付講座を開講しています。上智大学の全学部生と社会人が対象の公開講座で、「地球環境と科学技術」がテーマとなっ

ています。毎年、「エネルギーと環境」「世界の人口問題」「環境リスクマネジメント」などのテーマで地球環境問題についての講義が行われ、年間約450名の学生・社会人が受講しています。



## 2000s

## Mitsubishi Corporation International Scholarship

三菱商事は、発展途上国における青少年の育成と地域社会の文化・経済発展に継続的に貢献するため、海外拠点における奨学金制度「Mitsubishi Corporation International Scholarship」を2000年から導入しています。アジア・アフリカ・

中南米など発展途上国の15大学で実施しており、毎年約200名の学生に奨学金を授与しています。



## KIDS パソコンクラブ

三菱商事は2000年から、住友商事、三井物産、NPO「KIDS」と協働で児童養護施設向けパソコン教室「パソコンクラブ」を実施しています。これは、東京都内の児童養護施設へパソコンなどのIT機器を寄贈し、ボランティアが毎月定期的に児童養護施設を訪問



して子どもたちとパソコン指導をはじめとするさまざまな交流活動を行うプログラムで、地域型の社会貢献プロジェクトとして注目されています。これまで延べ30名ほどの社員ボランティアが参加しました。

## エコツアー「ボルネオ熱帯林植樹祭の旅」

2003年2月、マレーシア熱帯林再生実験プロジェクト(09ページご参照)の経過と成果を多くの人々に知ってもらうため「ボルネオ熱帯林植樹祭の旅」を実施、三菱商事・グループ各社の社員約30名が参加しました。参加者は、実験植栽地視察のほか、



マレーシア農業大学ピンツル分校内に現地の大学生らと約1,200本のフタバガ木科の苗を植樹しました(03年11月には2回目を実施)。

## アースウォッチ

アースウォッチは、世界各地において科学者と一般市民による野外調査プログラムの支援を行う国際的なNGOで、1972年に米国・ボストンで創設されました。三菱商事では、2002年より支援を開始(欧州は93年、米州は96年から)、社員が実際にアースウォッチ



のプログラムに参加しています。これまでメキシコ湾でのウミガメの産卵調査、伊豆半島でのイノシシの生息密度分布調査などさまざまなプログラムに世界各地のオフィスから約90名の社員が参加し、環境への関心を高めています。

## ボランティア体験講座

ボランティア活動を促進するため、2003年三菱商事は「知る」「体験する」「活動する」ことをテーマに「ボランティア体験講座」を開講しました。1回目は、高齢者の身体・精神面の変化などの講義、2回目は介護用具と介護保険についての講義のほか、高齢



者の不自由さを知るため、ギアを装着して歩行する高齢者疑似体験を行いました。3回目は千代田区の老人ホームを訪問し、ボランティア活動を実践。全3回の講座に延べ40名が参加しました。

## 社会貢献 30年の歴史 年表

### 1973年

- ・社会環境室を設置

### 1974年

- ・母と子の自然教室開始
- ・人工臓器の研究・開発開始

### 1975年

- ・リモート・センシング技術の研究開発援助開始

### 1978年

- ・春の自然教室(児童養護施設児童対象)開始

### 1979年

- ・東京コロニーへの支援開始
- ・太陽の家への支援開始

### 1983年

- ・三菱商事太陽設立

### 1988年

- ・再生紙事業開始

### 1990年

- ・地球環境室を設置
- ・熱帯林再生実験プロジェクト(マレーシア)開始

### 1991年

- ・社会貢献委員会設置
- ・米国三菱商事財団(MIC財団)設立  
[オーデュボン協会、ネイチャーコンサーバンシー、ニューヨーク子ども動物園などを支援]
- ・外国人留学生奨学金制度開始
- ・地域貢献施策開始(国内/海外)
- ・七里ガ浜クリーンアップ開始 ~ 96
- ・長崎・大村湾の清掃開始 ~ 00
- ・中部支社自然教室(養護施設児童対象のキャンプ)開始
- ・大分国際車いすマラソン大会支援開始
- ・黒人医科大学へ支援(南アフリカ)
- ・ハレ大学冠講座を開講(旧東ドイツ)  
など14件実施

### 1992年

- ・熱帯林再生実験プロジェクト(ブラジル)開始
- ・三菱商事欧阿基金設立  
[ロンドン動物園、アースウォッチなどを支援]
- ・「さわやかハートネット」(社内ボランティアサークル)開始
- ・劇場「アトスフィア」への支援開始
- ・財団法人ジョン万次郎ホイットフィールド記念国際草の根交流センターの理事会社となる
- ・身障者スキー大会支援開始 ~ 99
- ・地域貢献施策
- ・はばたけ21未来の子どもたちへ開始(新潟)
- ・「わんぱく教室(日帰りキャンプ)」開催(岡山)

- ・気象衛星の受信設備を寄贈(フィリピン)  
など12件実施

### 1993年

- ・丸の内市民環境フォーラム開始
- ・国際フレンドシッププログラム開始 ~ 02
- ・「母と子の自然教室」20周年
- ・地域貢献施策
- ・学童通学用ミニバス寄贈(ヨルダン)
- ・西豪州盲人協会向け三菱車を寄贈(オーストラリア)
- ・植物園に希少種子保存設備を寄贈(インドネシア)  
など9件実施

### 1994年

- ・手話講座・パソコン点訳講座開始
- ・地域貢献施策
- ・医療機器を寄贈(カザフスタン)
- ・新設図書館へ日本コーナーを寄贈(アラブ首長国連邦)  
など5件実施

### 1995年

- ・阪神淡路大震災義援金贈呈
- ・北海道「夢登山」実施
- ・地域貢献施策
- ・山岳救助隊へパジェロ寄贈(ポーランド)
- ・三菱商事ミャンマー基金設立(ミャンマー)
- ・シアトル大学向け環境研究機材寄贈(米国)  
など7件実施

社会貢献関連 支援先一覧

(2003年12月現在)

入会時期	団体名称	活動内容・目的	入会時期	団体名称	活動内容・目的
1960年	日本赤十字社	1877年の創立以来、人道と博愛の精神の下、100年以上にわたり災害救護・国際救援をはじめとする数々の人道的事業を行っている。	1996年	特定非営利活動法人 日本NPOセンター	新しい市民社会の実現のため、情報交流、人材開発、調査研究、政策提言などの活動を通じて、分野や地域を超えたNPOの活動基盤の強化と、それらと企業および政府・地方公共団体とのパートナーシップの確立を図ることを目的とする団体。
1965年	財団法人 東京基督教女青年会 (YWCA)	キリスト教に基づいた女性の社会教育団体として発足。すべての人が神の前に等しい価値を有することを信じ、会員相互の交わりを深め、人間の尊厳を守り、平和と正義のため世界の会員と共に活動することを目的とする。	1996年	社団法人 企業メセナ協議会	企業によるメセナ(芸術文化支援)活動の活性化を目的に、1990年に設立された公益法人。企業メセナだけでなく、文化政策やアートマネジメントなど芸術文化支援全般を対象とする、日本で唯一のメセナ専門の機関。
1967年	学校法人 日本聾話学校後援会	アメリカ人宣教師により開校、1933年工学博士山本忠興が理事長および校長となる。山本博士の校友・人脈から各方面へ後援会体制が拡大していった全国唯一の私立聾話学校。手話ではなく、聴覚主導の口話法による指導・教育を行う。	1996年	社団法人 日本フィランソロピー協会	ボランティア・マインドを醸成し、寄付の文化を育て、それを財源に企業・各団体と協力して新しいNPOを育成・支援。真の民主主義社会「フィランソロピー社会」を目指し、必要なインフラを整えるため幅広く活動。
1972年	財団法人 東京キリスト教青年会 (東京YMCA)	青少年の健全育成事業と地域のボランティア活動を支援。	1996年	特定非営利活動法人 スペシャルオリンピックス日本	スペシャルオリンピックス(本部:米国)は、知的発達障害のある人々(アスリート)の自立と社会参加を目指し、日常的なスポーツプログラムと、その成果の発表の場である競技会を提供する国際的なスポーツ組織。夏季・冬季の世界大会(各4年ごと)を開催している。
1979年	社会福祉法人 太陽の家	障害者の働く場づくりと社会的自立を支援する社会福祉法人。身体障害者がプログラマーやシステムエンジニアとして社会で就労するための授産科目「情報処理科」を支援。	2002年	特定非営利活動法人 アースウォッチ・ジャパン	地球の生態系や自然環境の変化に関心の高い科学者と一般市民(ボランティア)を動員し、人類の持続的将来に資する知識基盤の構築、ならびに自然資源と人類の文化遺産の保全を促進することを目的とした環境団体。
1979年	社会福祉法人 東京コロニー	社会就労センター(授産施設)や福祉工場などの働く場を通じ、障害者の「(社会への)完全参加と平等」を実現することを事業目的とする社会福祉法人。「重度身体障害者在宅パソコン講習」とその後の就労支援を事業の一つとしている。	2002年	特定非営利活動法人 国際協力NGOセンター (JANIC)	共に生きる地球市民社会を目指して、1987年に国際協力NGOのリーダーたちによって設立されたネットワーク型の市民団体。国際協力を担うNGOの活動を推進し、市民が活動しやすい社会基盤の強化を図ることを目的としている。
1992年	財団法人 ジョン万次郎ポイトフィールド記念 国際草の根交流センター	日米両国および世界各国の市民レベルでの草の根交流事業を行う財団。その中心事業が日米草の根交流サミット大会。	2003年	特定非営利活動法人 人道目的の地雷除去支援の会(JAHDS)	人道目的の地雷除去関連技術開発、国際NGOを含む現地地雷除去機関への関連技術供与や支援、地雷除去に必要な施設・設備類の提供による除去活動後方支援、地雷問題に関する国内外の情報収集および情報提供を行う。
1995年	ジュニア・アチーブメント ジャパン	1919年、米国で発足した世界最大の経済教育団体。将来を担う青少年に対し、一人ひとりが「考え、議論する」自立的判断力・社会適応能力などを身に付けさせるプロジェクト。各種教材やプログラムを学校に対して無償配布している。	2003年	社団法人 日本動物福祉協会	動物愛護法の周知徹底と動物関連法の整備などを行っている社団法人。動物のために、社会のために、互いを思いやる温かい社会を目指している。

1996年

- ・環境レポートの発行を開始
- ・日韓視覚障害者国際交流開始 ~ 00
- ・児童養護施設向けサッカースクール開始
- ・上智大学寄付講座開始
- ・地域貢献施策
- ・腎臓病検査機器の寄贈(バングラデシュ)
- ・北京市内へ桜苗木500本植樹(中国)
- ・低所得者地域の診療所改修増築(ペルー)など8件実施

1997年

- ・地域貢献施策
- ・地元貧困層の母子向け病院へ寄付(ポリビア)
- ・ベトナム古文書保存学術調査支援(ベトナム)
- ・ケニア保健省向けに救急車3台を寄贈(ケニア)など22件実施

1998年

- ・社会環境室と地球環境室を統合し、環境室となる
- ・ISO14001認証を本店にて取得
- ・長野パラリンピック通訳ボランティア社員参加
- ・地域貢献施策
- ・養護施設新設への資金協力(コロンビア)
- ・内戦で荒廃した小学校再建を支援(カンボジア)
- ・サハラ市向け救急車寄贈(ロシア)など17件実施

1999年

- ・ISO14001認証を国内6支社にて取得
- ・中南米災害復興支援チャリティイベント協賛(アートスフィア)
- ・地域貢献施策
- ・オリノコ川流域の自然環境回復計画支援(ベネズエラ)
- ・重慶市・長江上流域の被害修復援助(中国)
- ・モザンビーク地雷撤去訓練費用援助(南アフリカ)など28件実施

2000年

- ・Mitsubishi Corporation International Scholarship(海外奨学金制度)開始
- ・KIDS パソコンクラブ開始
- ・地域貢献施策
- ・障害児などの教育施設建設への支援(カタール)
- ・スリランカ・ケゴール地区へコンピューター寄贈(スリランカ)
- ・ハリケーン・ミッチー被災者用住宅150戸を建設(グアテマラ)など24件実施

2001年

- ・ISO14001認証取得を更新
- ・地域貢献施策
- ・米国同時多発テロへ義援金寄付(米国)
- ・モルドバ共和国向け救急車寄贈(ウクライナ)

- ・大連市向け献血車寄贈(中国)
- ・水害被災地帯へポンプ車寄贈(メキシコ)など21件実施

2002年

- ・環境レポートを「サステナビリティ・レポート」と名称変更し発行
- ・奥多摩湖クリーンアップ(広報部)
- ・FC東京サッカースクール・ベガルタ仙台サッカースクール開始(年2回)
- ・梯剛之ピアノリサイタル支援
- ・アースウォッチ支援開始
- ・地域貢献施策
- ・観光促進のための日本語ガイドブックなどの出版(ブルネイ)
- ・陶器製造トレーニングセンター建設支援(エチオピア)など21件実施

2003年

- ・『サステナビリティ・レポート2003』が「持続可能性報告大賞(環境大臣賞)」を受賞
- ・エコツアー「ボルネオ熱帯林植樹祭の旅」実施
- ・ボランティア体験講座開催
- ・三浦半島クリーンアップ&アート教室(広報部)
- ・社会貢献活動30周年
- ・地域貢献施策
- ・新型コロナウイルス(SARS)対策用に防護服寄贈(中国・台湾)
- ・戦後移民50周年記念祭へ桜寄贈(ブラジル)
- ・イラン地震被災者へ灯油ヒーター寄贈(イラン)など18件実施

## 広がる地域貢献施策

三菱商事は、地域社会の発展に寄与するため、1991年から社内募集により地域貢献施策を行っています。各場所から応募があった案件をもとに、地域のニーズに合った施策の実施を目指しています。スタート以来、200件以上実施しており、その中から四つの海外事例を紹介します。

### インド

#### タゴール記念館の修復援助、インド・日本ギャラリー設置

2002年、日印外交関係樹立50周年に当たり、三菱商事はインドのコルカタにあるタゴール記念館の修復援助およびインド・日本ギャラリーの創設を行いました。この記念館は、アジア初のノーベル賞受賞者（文学賞）で日本との交流にも力を尽くしたことで知られるラビンドラナース・タゴール氏(1861～1941年)の功績を後世に残す

ためのもの。近代インドの先駆者たちと呼ばれるタゴール一族がかつて暮らしていた旧邸宅でもあり、現在は、ラビンドラ大学のキャンパスの一角に位置しています。

コルカタは三菱商事のインド拠点発祥の地で、インド国民と共に70年以上の歴史を歩んできた場所であることから、傷みの目立つ同館維持のため、三菱商事コルカタ



駐在事務所を通じて修復援助等を取り進めました。このインド・日本ギャラリーは、同館の最も大切な場所として保存されている、同氏が誕生した部屋の隣に設置されました。

### ペルー

#### 貧困層向けに診療所を建設

ペルー共和国アマゾン地帯ウカヤリ県の県庁所在地、プカルパ市では、長い間、医療施設の不足や貧困層の衛生改善が懸案となっていました。そこで、三菱商事は地域住民に医療サービスを提供するため、ペルー三菱を通じて、診療所の建設資金を支援しました。2000年1月、診療所引き渡し式が行われ、フジモリ大統領(当時)の名代のMINSa 厚生大臣(当時)、プカルパ市長、ペルー三菱商事社長が出席しました。式典では、地元の人々や現地マスコミが注目する中、「Donated by Mitsubishi Corporation」と書かれたプレートが除幕され、三菱商事の支援に対する大きな期待をうかがわせるものとなりました。



### 台湾

#### 台湾地震の被災地域に三菱車を寄贈

1999年、三菱商事は台湾地震の被災地域の救済支援として、台湾三菱商事を通じ、三菱自工と共に、救援物資の輸送などに使用する三菱自工製デリカ4WDバン16台を寄贈しました。寄贈先は、被害の深刻な南投県をはじめとする各被災地域。台湾中部を襲ったマグニチュード7.6の大地震は、台中県・南投県を中心に未曾有の大惨事となり、停電と断水による産業界への影響は100億ドルを超え、経済面でも大きな打撃を与えました。そうした中、台湾三菱商事社長より、南投県の被災地域や経済建設委員会オフィスにおいて、震災見舞いと寄付目録が直接手渡され、現地関係者からたくさんの感謝の言葉を頂きました。



トルコ

## トルコ西部地震被災地に 運搬用トラックとして三菱車を寄贈

1999年8月17日にトルコ北西部を襲ったマグニチュード7.4の大地震は、イズミット市を中心に未曾有の大災害となりました。震源地がトルコ最大の工業地帯であったため、経済面でも大きな打撃を受け、三菱商事の取引先であるサハンジ・コチ両グループ傘下企業でも多くの人的・物的被害がありました。三菱商事は、緊急の地域貢献施策として、救援物資運搬用のトラック、三菱自工製ピク

アップトラック9台をトルコ赤新月社に寄贈しました。9月16日、トルコ赤新月社イスタンブール事務所にて、イスタンブール支店長より震災見舞いと共に寄付目録が手渡されました。トルコ赤新月社は多数のスタッフを動員、被災地域でテントの配布・設置、食事や飲料水の提供を行いました。



## 三菱商事欧阿基金

三菱商事は、絶滅の恐れのある動植物を中心とした環境に関する教育研究活動を推進するため、1992年に英国で欧州・アフリカを対象とする基金(名称:Mitsubishi Corporation Fund for Europe & Africa)を設立し、数多くのプロジェクトに資金提供をしています。古くから自然環境保護に力を入れているロンドン動物園に対し、'95年のミレニアム自然保護センター設立や生物多様性関連展示施設「Web of Life」などを支援するほか、南アフリカ山猫プロジェクト、ジンバブエやナミビアにおけるライオンやチータなどと人間との関係に関する研究への資金援助も行っています。さらに、植物保護を目指す世界的な植物園ネットワーク、国際植物園保護協会も支援。また、自然環境保護活動を行う世界的非営利組織「アースウォッチ・インスティテュート」が主催する各種自然保護プロジェクトに、毎年ボランティアとして現地法人の社員を派遣しています。



ロンドン動物園の「Web of Life」

## 米国三菱商事財団

三菱商事は、米国法人 Mitsubishi International Corporation(本社ニューヨーク)と、米国の社会問題の解決に寄与するための財団(名称:MIC Foundation)を1991年設立しました。設立以来、環境教育活動のほか、経済的あるいは社会的に恵まれない青少年に対するさまざまな支援を行っています。また、支援活動の一環として、国際的な自然保護NGOであるオーデュボン協会(本部ニューヨーク)に寄付をしています。毎年1万名以上の人を訪れる同協会のサバルパームグローブセンターとサンクチュアリ(自然保護区)には、野外生物観察ステーションや蝶の飼育園などがあり、約200ヘクタールもの広大な保護地域に屋外シアターも設置されました。サバルパームグローブセンターでは、年間を通じて環境教育プログラムを実施しており、子どもたちが地球生態学を楽しく学べる機会を提供しています。



サバルパームグローブセンターで地球生態学を学ぶ子どもたち



## 社会貢献活動を想う

## 歴代室長からのメッセージ

## これからも社会貢献活動を地道に継続してほしい



伊藤 靖夫

1983年3月～'87年2月社会環境室長

私が社会環境室長としてさまざまな事業に携わったのはもう20年ほど前のことになります。当時、三菱商事では「環境」「こころ」「福祉」の3つのテーマで社会貢献活動を続けていましたが、中でも「こころ」をテーマとした「母と子の

自然教室」は、私にとって非常に思い出深い活動でした。長野県飯森でスタートした開催地を群馬県大穴へ移し、さらにその後、新潟県吉里へと二度変更したこと、また、自然教室のリーダーに女子社員を起用したことなど、今も鮮明に記憶に残っています。東京都社会福祉協議会、東京YMCA、それぞれの地域の民宿の皆さんのご協力には、今も心から感謝しています。

この自然教室は3泊4日の短い期間ではありますが、参加者と共に民宿に泊まり、お世話をするリーダーたちの献身的な努力によって、参加者同士の心の触れ合いが生まれ、子どもたちの表情も日に

日に生き生きとしてくるのを実感することができました。

三菱商事の社会貢献活動は、利益の社会還元ではありません。「企業が存続していくための社会的経費」として負担していくという経営理念に基づいて、長年にわたり実践されてきたものです。こうした考え方が社会から高く評価されているのだと私は思います。厳しい経営環境下にあると思いますが、社会貢献活動を行うことは社員一人ひとりの人間性を高めることにつながり、ひいては三菱商事の発展につながっていくものです。だからこそ、今後も地道に継続してほしいと思います。

## 「誰かのため」が「自分のため」に



菱田 義男

1989年6月～'92年5月社会環境室長

私の就任当時、社会環境室の人員は最も少なく、活動に十分な人数とは言えませんが、諸先輩が築いてきた道を着実に歩いていこうと、スタッフ全員でアイデアを出し合いながら、社会貢献活動を推進していきました。応募が少なく

なってきた社員ボランティアについては積極的に社内公募をしました。その結果、企業の社会貢献活動、いわゆるフィランソロピーが脚光を浴び始めた時期とも重なり、1990年の「母と子の自然教室」の女性社員ボランティアが倍増したことや、男性社員へもボランティアを呼び掛け喜んで参加してくれたことは、うれしい思い出となっています。

'91年には社内には社会貢献委員会が設置され活動が全社的に拡大、「大分国際車いすマラソン大会」にボランティアとして、九州の支社・支店から社員が参加するなど、国内各場所の社員が自らのアイデアで動くことで、三菱商事の社

会貢献活動がさらに発展していきました。

在勤中に私を支えてくれた社会環境室のスタッフや活動に参加してくれた社員、また関係各所の皆様には心から感謝しています。私自身もやりがいを感じ、楽しく活動に取り組むことができました。

当時、活動に参加した社員たちは、「ボランティアは、誰かのためだけではなく、自分のためにもなる」ことを実感したとよく口にしていました。これは時を経た今も変わらぬものだと思います。こんな素直な気持ちで、受け継がれてきた三菱商事の社会貢献活動がこれからも続いていくことを心から願っています。



## 社員のボランティア活動日本一を目指して



**中井 幸二**  
1992年6月～'95年1月社会環境室長

私が就任した1992年は、企業の社会貢献活動が活発化した時期で、多くの企業がメセナやフィランソロピーなどに取り組んでいました。そんな中、私は三菱商事の社会貢献活動をオリジナルのありものにしたいと考えました。

ただ単に資金を支援するだけの活動ではなく、社員自らが企画し参加するボランティア活動を行おうと考えたのです。

そこで、社内に「さわやかハートねっ」というボランティアサークルを立ち上げ、われわれ自身の手で活動の場を作り出していきました。「社員のボランティア活動日本一」を目指して取り組んだ日々は忘れられない思い出です。

こうした活動の一つが「大分国際車いすマラソン大会」です。仮設トイレの設置や撤去、ゴールした参加者に毛布や飲み物を渡すなど、社員が積極的に大会運営に参加しました。中でも、多くのボランティアが敬遠しがちな外国人選

手へ、気軽に声を掛ける光景を見て「さすが三菱商事の人間だ」と頼もしく思ったことを今も鮮明に覚えています。

それから毎年、延べ1,000人以上の社員が社会貢献活動に参加し、各メディアにもたくさん取り上げられました。

時代と共に、社会貢献活動の形態は変化するかもしれませんが、「母と子の自然教室」に代表されるように、ボランティアとして社員自らが参加するという姿勢は、変わらずに持ち続けてほしいと思います。今後も、三菱商事の社会貢献活動が発展を続け、ビジネスだけでなく、社会貢献の分野でも常にリーディングカンパニーで在り続けることを願っています。

## 社会あっての会社。母と子と関係者に感謝！



**成田 誠一**  
1995年1月～'96年3月地球環境室長

私の地球環境室長時代は熱帯林伐採や塩田開発問題で世間の誤解や批判を浴びているときでした。社会あっての三菱商事。社会における企業の役割を改めて見直し、改善すべきところは改善し、主張すべきことは主張する、それは

「企業の社会的責任」です。来る日も来る日も、私たちは人に会い、批判に耳を傾け、誤解を解き、社会とのコミュニケーションに努力しました。今思い起こしても、社内外の関係者に感謝することばかりです。

お隣の社会環境室も社会とのコミュニケーションに努力していました。さまざまなビジネスを通して豊かな社会の実現に貢献してきた三菱商事ですが、「母と子の自然教室」のような社員参加型の活動も行ってきました。社会環境室には多くのボランティアが出入りし、夢を語り、企画を練り、活動の準備をしていました。夏が終わると彼らは一段と魅力的になっていました。

今考えると、吉里の自然教室で母や子や関係者と共に汗を流しながら、「こころ」というものを学んだのでした。

私はその後、地球環境問題対応と社会貢献活動の両方を見るようになりました。いずれも根本は会社と社会のコミュニケーションです。三綱領にある「所期奉公」は、英語ではCorporate Responsibility to Society、意味するところは実に明解です。社会あっての三菱商事。「母と子の自然教室」は30周年を迎えました。それは社員が「こころ」を学ぶ場でもあります。これまで参加してくれた約15,000人の母と子と関係者に感謝してやみません。